

2026.02.27 歴史会. 図資料

天正四年という段階は、北条氏と里見氏との抗争が激化し、次第に北条側が優勢となっていく時期であるが、ここからも、北条氏が内房地域における半手を積極的に取り込もうとする姿勢が感じられる。そして、こうした氏規の指示が、本牧郷の作言と同じ天正四年になされているという点は注目される。北条氏が内房地域に積極的に半手の村を立てようとしていたのに対し、本牧郷もまた、里見氏に貢納の半分を差し出していたのである。

さらに、『役帳』には三浦衆の西脇外記の知行として、三浦津久井があげられているが、その直後に三浦郡内の「敵手作」十五貫二六文(二五二万円相当)があげられている(『新横』二四〇三)。「敵手作」は「半手」と同義と考えられるが、三浦半島津久井近辺の地も貢納の半分を「向地」に差し出していたのだろう。里見氏もまた、「向地」の半手を積極的に取り込もうとしていたのである。

なお、天正十七年二月段階で、安房国徳田郷吉浜村(千葉県安房郡鋸南町)に半手が設定されていることが確認できる(安房妙本寺文書、『新横』二六七四)。半手の一方が、同郷領主の宇部氏であったことはまちがいないが、もう一方は明確でない。しかし、吉浜村が内房湾岸の村落であることを考えれば、もう一方の相手は、北条氏あるいはそれに属する勢力だった可能性は十分に想定できよう。この推定が正しければ、吉浜村においては、天正五年に北条氏と里見氏が和睦して以降も、万一の事態に備えて半手が設定され続けたということになり、沿岸の村落の危機意識を感

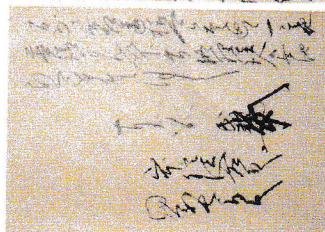
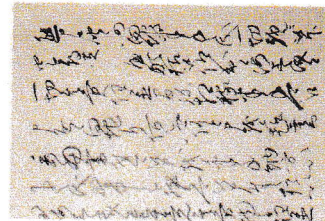
じ取ることができる。

このように、この時期の江戸湾岸の村々は、敵対する北条・里見両氏に一定の貢納をおこなって両属関係を築くことで、かろうじて安定を保っており、その一方で大名側も敵地の半手を積極的に取り込もうとしていたのである。さらに、天正四年の北条氏規の文書の内容から考えれば、こうした半手の契約や解消は、村側の判断によるものだったと推測される。

海上の平和を体現する人々

当時、江戸湾を航行する民間の商船が「海賊」に拿捕されるといった事態や、沿岸の村々が焼き払われるということが日常的に起こりえた状況のなかで、江戸湾沿岸の村々は、半手をおこなうことで自衛策を講じていたことについては前項で述べた。その一方、大名側もただ手をこまねいていたわけではなかった。

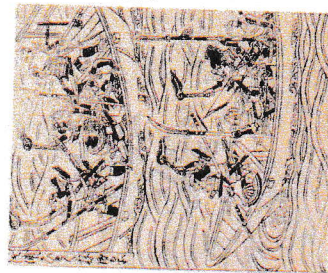
元龜三年(一五七二)四月、里見義弘は対岸の武蔵金沢龍華寺(神奈川県横浜市金沢区)に制札を下している(郊遊漫録所収文書、『新横』二四九四)。制札という文書の性格から考えて、これは安全保障を欲した龍華寺側からの申請に基づき発給されたと考えられる。中世から、上総富津と武蔵野嶋・洲崎間には安定的な渡船航路が成立していたが、その反面、渡船地点は対岸勢力の脅威にさらされやすかったの



(年未詳)十月八日付け北条氏親書写
■山本信濃入道(家次)と同新七郎(正次)に宛て、内房地域で積極的に半手を取り立てることや、年貢などの具体的な取納方法については野中氏に申し付けるよう命じている「越前史料所収山本文書」
国文学研究資料館蔵

*宇部氏 里見氏の家臣。安房国吉浜村(千葉県安房郡鋸南町)周辺を拠点とし、妙本寺(鋸南町)の旦那であったと思われる。天正十年代以降にみえる弘政は、里見義弘の「巫」からとつたとされる。宇部氏は、「海の領主」としての性格をもっていたと考えられ、先述の豊方氏(五二一頁)同様、他流派との関係も確認できる。

「いつ浦へかひそくふね渡る」の図 伊豆沿岸の村々に、北条の「海賊衆」が襲撃しようとしている場面(北条五代記) 国立公文書館蔵



だろう。そのため、北条氏領国に属する龍華寺としても、対岸の里見氏の発する乱妨狼藉を禁じる制札に安全保障が必要だったのである。

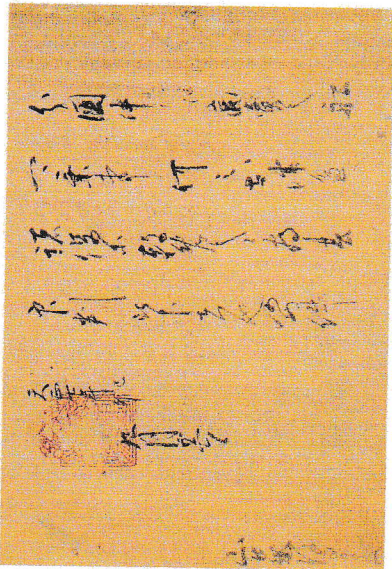
また、天正三年（一五七五）十二月、里見義継（義頼）は金沢を拠点に廻船の用をつとめていた山口越後守に、「海中往行」のための安全保障を与えている（竹内文平氏所蔵文書、「新横」二五二七）。さらに、天正七年九月に里見梅王丸は、同じく山口越後守に対して分国上総での商売を許可するとともに、港湾使用料などと考えられる諸役を免じている（山口文書、「新横」二五六二）。

このように、山口氏が対岸の里見氏から安全保障を与えられているという事実からは、北条氏領国に属する者でも、江戸湾では里見氏の安全保障もなければ、安心して航海することができなかつたという状況を読み取ることができよう。さらに山口氏は、北条氏の廻船の用をつとめるとともに、里見氏からその分国内での商売を認められているわけで、前項でふれた上総の野中氏と同様に、山口氏もまた北条氏・里見氏に両属する存在であつたことはまちがいない。

一方の北条氏も、前項でふれた天正四年の本牧郷からの「佐言」に対して、半済については認められないが、その代償として、本牧から上総木更津への海中往行の安全を保障するとしていた。まさに、自らの領国に属する者の江戸湾における安全は、自らが守るとする北条氏の強い意思表示といつてよいだろう。

このように、当時の江戸湾岸の村々や流通商人たちは、北条氏・里見氏双方の安

全保障を受けていたのである。また、大名側もこうした保障を積極的に実行していた様子をうかがうことができる。いわば、日常的に発生する江戸湾での脅威に対して、沿岸地域や江戸湾を航行する商人・商船は、北条氏・里見氏への両属関係を保つとともに、対岸地域の大名家の安全保障をも獲得することでその危険を回避し、「半手」といった手段とあわせて、「海上の平和」を実現していたのであつた。



天正7年（1579）9月26日付け里見梅王丸印状（山口文書）
神奈川県立金沢文庫蔵

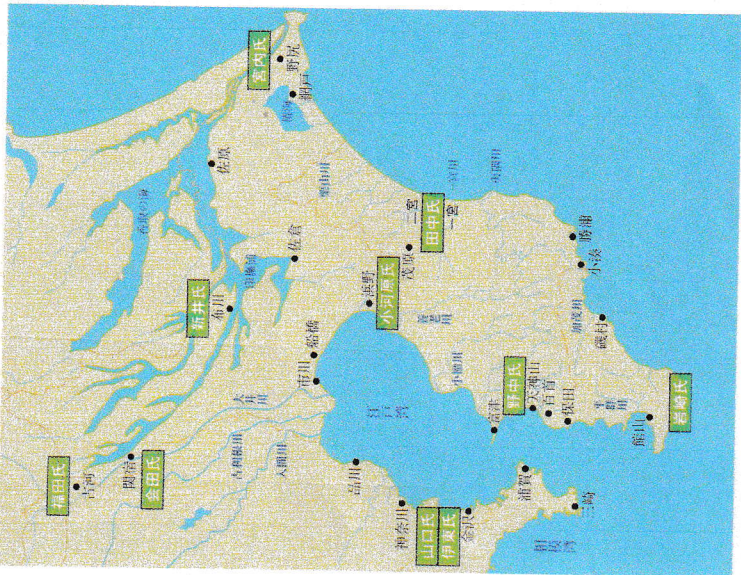
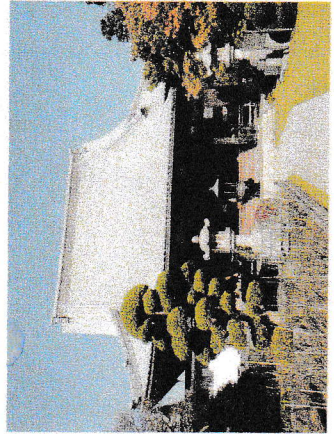


図10 戦国期の関東における流通商人の分布
滝川恒昭「戦国期房総における流通商人の存在形態」（千葉歴史学会編「中世東国の地域権力と社会」岩田書院、1996年）をもとに作成



龍華寺 大浦区内に所在した、真言宗御室派の有力寺院。創建当初は屬村上杉氏被官の菅野氏や古尾谷氏の庇護を得たが、戦国末期には流通商人・山口氏が旦那となった。横浜市金沢区

*里見梅王丸 義弘の子で、義弘死後にその遺領（上総国）を継承するが、家督をめぐる義頼と対立し、敗れる。その後は出家・隠棲し、里見氏没落後の元和八年（一六二二）に没した。

富岡に伝わる伝承

文禄二年（一五九三）に安房・上総両国から盗賊数十人が押し渡つてきて乱妨に及んだので、村民たちはこの山中に逃れてきて、小屋を建ててここにいたためにこの名があるという。ここに「銭金塚」と呼ぶ塚がある」といった由来が記されている。さらに、同じく小名「鐘掛松」については、「前にふれた安房・上総両国から強盗がやってきた際、いずれの寺院のものであろうか、鐘をこの地の松に掛けて隠し置いたことからこの名がついた」とある。

また、同村の「旧家者百姓大左衛門」の由来として、「柳下氏である。祖先は柳下豊後守とい、文禄二年に安房・上総の盗賊がこの辺りで乱妨に及んだ際、村内の長昌庵は豊後守が開基した庵室であつたから、その本尊を守っていたところ、賊が大勢やつてきて、槍で豊後守に手疵を負わせて本尊を奪い去つていったが、このとき豊後守は敵の槍を取り置いたため、それは今に家蔵されている。その由来を記した書一卷も添えられている。豊後守はその際の手疵がもとで、同年閏九月十七日に死んだとのことである。それから代々連綿として今の太左衛門に至ることある。さらに長昌庵の項には、その本尊の阿弥陀立像は文禄二年に盗賊によつて奪い去られたものの、その後、祟りがあつて戻されたとしている。

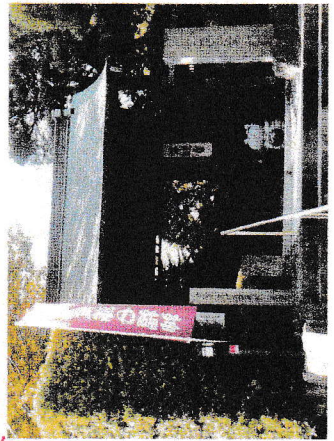
こうした富岡村に伝わる一連の伝承を総合すれば、次のようなものとなろう。北条氏滅亡後の文禄二年に、富岡村では海を渡つて房総半島からやつてきた海賊の襲撃を受けた。村民は被害を避けるため、村内西方の山中に避難し（その後この地は小

屋場と呼ばれる）、また、海賊による略奪から守るため、村内のある寺院の梵鐘を松の木に掛けて隠し置いた。さらにその際、柳下豊後守という人物は、庵室長昌庵の本尊を守ろうとしたものの、大勢の海賊たちの襲撃によつて手疵を被り、本尊も奪われてしまった。豊後守は同年閏九月十七日にその手疵がもとで没したが、後に奪われた本尊は返還された、といったところであらう。

ここに記された伝承がそのまま歴史的事実といえるかどうかは、もはや証明する術がないが、少なくとも何らかの歴史的事実を反映している可能性はきわめて高いと思われる。この伝承は、天正十八年（一五九〇）の小田原合戦で北条氏が滅亡し、豊臣政権によつて「天下統一」がなされた後も、富岡村のような江戸湾岸の村々では、「向地」の海賊による襲撃が存在した可能性を示唆するものといえる。こうした襲撃が起こりえたからこそ、「小屋場」といったような避難場所が設けられたのであり、「銭金塚」とは、「村民たちが自らの所持する金品を海賊の略奪から守るために隠し埋めた塚」といった伝承地だつたと思われる。

また、「江戸名所図会」巻之二「天腕之部」には、東寺尾村（横浜市鶴見区）の松隠寺（松蔭寺の前名）が兼帯した慈眼堂の項に、「義高入道の墓」があげられており、その絵も掲げられている。説明には、

仁王門の傍ら、古墳の前に石の地藏尊を安置した小堂がある。軒に「義高入道」と記した額が掲げられている。伝わるところによれば、義高入道は小笠原藏人



長昌寺 ■ 臨濟宗建長寺派で、雷岡山と号する。柳下豊後守が亡き妻の菩提を弔うため、天正年間創建した。天然痘除けの神として知られる辛神様（楊柳観音）が祀られている。現在の本尊は、寛永年間（一六二四～四四）作成と伝わる釈迦如来坐像 横浜市金沢区

松蔭寺 ■ 仙鶴山と号し、享保年間（一七二六～三六）頃までは松蔭寺と呼ばれていたという 横浜市鶴見区

